

## 平成31年2月1日現在の世帯数と人口

(千種区 18.18Km<sup>2</sup>)

学区名	世帯数	人 口			対前月増減	
		総数	男	女	世帯数	人口
1 千 種	5,468	8,805	4,494	4,311	△ 9	△ 16
2 千 石	4,035	6,869	3,434	3,435	10	4
3 内 山	5,581	7,735	4,081	3,654	△ 26	△ 41
4 大 和	3,383	6,663	3,289	3,374	△ 14	△ 12
5 上 野	7,291	15,411	7,662	7,749	10	16
6 高 見	7,370	13,517	6,467	7,050	1	3
7 春 岡	6,862	10,946	5,756	5,190	7	21
8 田 代	11,573	22,072	10,687	11,385	13	31
9 東 山	10,352	19,514	9,620	9,894	3	8
10 見 付	4,359	8,127	4,095	4,032	△ 5	△ 3
11 星 ケ 丘	3,534	6,898	3,123	3,775	△ 3	△ 2
12 自 由 ケ 丘	3,541	7,231	3,298	3,933	2	2
13 富 士 見 台	6,456	15,396	7,135	8,261	△ 1	11
14 宮 根	3,810	8,259	3,947	4,312	△ 2	△ 12
15 千 代 田 橋	3,656	8,483	3,981	4,502	△ 8	△ 19
千 種 区 計	87,271	165,926	81,069	84,857	△ 22	△ 9
H30.2.1	86,956	166,389	81,448	84,941	44	43
対 前 年 比	315	△ 463	△ 379	△ 84	△ 66	△ 52
名 古 屋 市	1,104,560	2,321,421	1,146,506	1,174,915	106	△ 306
愛 知 県 ( H31.1.1 )	3,201,017	7,543,393	3,773,778	3,769,615	674	△ 811

前月中の増減内訳	自然動態			社会動態		
	出 生	死 亡	自然増減	転 入	転 出	社会増減
	108	173	△ 65	862	806	56

【参考】	国勢調査千種区人口				これまでの最大人口	
	昭和55年	166,837	平成12年	148,537	173,598 (昭和50年2月1日)	
	昭和60年	163,762	平成17年	153,118		
	平成2年	156,478	平成22年	160,015	これまでの最少人口	
	平成7年	148,847	平成27年	164,696	146,727 (平成11年4月1日)	

注) 世帯数と人口は、平成27年国勢調査結果確定値を基礎とし、毎月の住民基本台帳人口の異動数を加減して推計したものである。

## 千種区の性比の状況

今回は、千種区の性比(女性の人口を100とした場合の男性の人口数)の状況を見てみます。

図1：名古屋市全体および各区の性比(各年10月1日)

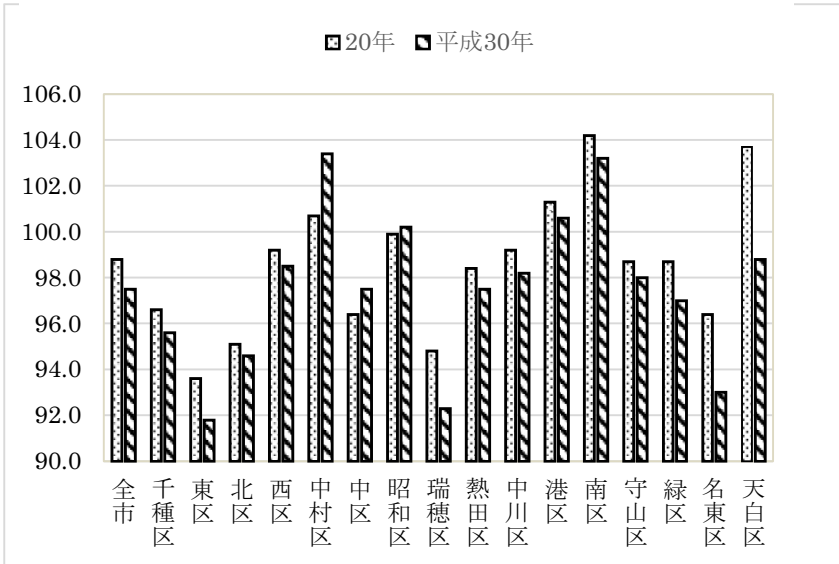


図1は名古屋市全体と各区の性比を示しています。千種区の平成30年10月1日現在の性比は95.6です。これは名古屋市全体(97.5)を下回っており、16区中12番目に低い値となっています。性比が最も高いのは中村区(103.4)、最も低いのは東区(91.8)です。平成20年と比較すると千種区は96.6から1.0下がっており、名古屋市全体でも中村区、中区、昭和区以外の区で下がっています。

図2：年齢5歳階級別の性比(平成30年10月1日)

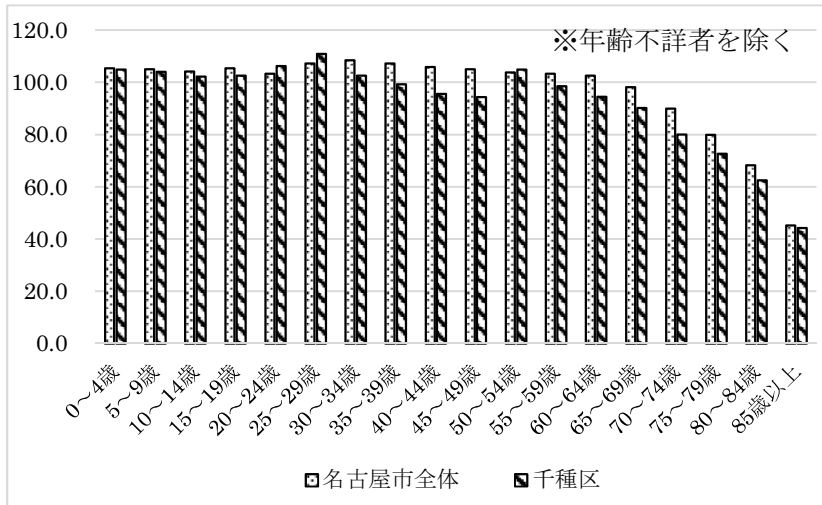
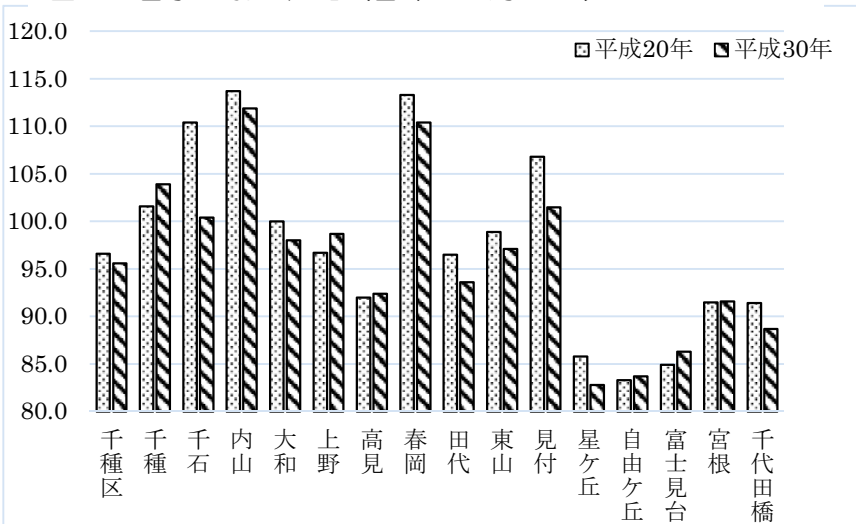


図2では、名古屋市全体と千種区の年齢5歳階級別の性比を示しています。千種区では0歳~34歳の区分で105前後と高い一方、35歳からは50歳~54歳以外で100を下回っています。一方、名古屋市全体では、64歳以下の全ての区分では100を超えていて、49歳以下の区分では105前後の数値となっています。

図3：各学区別の性比(各年10月1日)



次に、千種区内の各学区の性比をみてみます(図3)。平成30年10月1日現在で性比がもっとも高い学区は内山学区(111.9)で、もっとも低い学区は星ヶ丘学区(82.8)でした。また、平成20年10月1日現在でもっとも性比が高い学区は、内山学区(113.7)、もっとも低い学区は自由ヶ丘学区(83.3)でした。